

III 平成27（2015）年度事業概要

1. 理事会・評議員会

- ・平成27年度第1回定例理事会（平成27年5月22日）
〔主な議決事項〕平成26年度事業・決算報告
- ・平成27年度第1回定期評議員会（平成27年6月12日）
〔主な議決事項〕平成26年度事業・決算報告
- ・平成27年度第1回臨時理事会（平成27年6月12日、みなし決議による）
〔主な議決事項〕理事長、業務執行理事の選定
- ・平成27年度第2回定例理事会（平成28年2月19日）
〔主な議決事項〕平成27年度補正予算、平成28年度事業計画・収支予算
- ・平成27年度第1回臨時評議員会（平成28年3月11日）
〔主な議決事項〕平成27年度補正予算、平成28年度事業計画・収支予算

2. 決 算

貸借対照表の要旨
(平成28年3月31日現在) (単位:千円)

資産の部		負債及び正味財産の部	
流動資産	27,289	流動負債	5,348
固定資産	349,849	固定負債	0
基本財産	1,200	負債合計	5,348
特定資産	258,821	指定正味財産	157,558
その他固定資産	89,828	(基本財産充当額)	1,200
		(特定資産充当額)	156,358
		一般正味財産	214,232
		(基本財産充当額)	0
		(特定資産充当額)	102,463
		正味財産合計	371,790
合計	377,138	合計	377,138

正味財産増減計算書の要旨

自 平成27年4月1日
至 平成28年3月31日
(単位:千円)

科 目	金 額
経常収益	32,723
経常費用	32,438
(うち事業費)	28,815
(うち管理費)	3,623
経常外収益	0
経常外費用	0
法人税、住民税及び事業税	70
当期一般正味財産増減額	215
当期指定正味財産増減額	△ 11,882

3. 角田文衛博士顕彰事業

(1) 第5回「角田文衛古代学奨励賞」

〔賞の趣旨〕

平成22年に当協会が創立60周年の年を迎えたことを記念し、当協会の創立者・故角田文衛博士の名を冠した角田文衛古代学奨励賞を創設。

本賞は、季刊『古代文化』への投稿原稿の中から秀作を選んで表彰し、古代史研究の奨励と若手研究者の支援を意図するものである。

〔選考の経過〕

第5回は『古代文化』第65巻（平成25年）～第66巻（平成26年）までの2ヶ年分の投稿論文のうち、『古代文化』編集委員・編集参与・編集協力委員等63名の委員から推薦を受けた9編の論文・研究ノートを対象とし、編集委員・編集参与を構成員とする選考委員会での審議を経て選考された。

授賞式は10月3日佛教大学四条センターにおいて執り行われ、賞状、副賞（研究奨励金）、記念品（角田文衛著『古代学の展開』、山川出版社、2005年）が贈られた。

〔受賞者・受賞論文・略歴〕

関根 章義（せきねあきよし）

「古代陸奥国における陶硯の受容と展開—城柵官衙遺跡を中心として—」（『古代文化』第66巻第3号、平成26年12月）

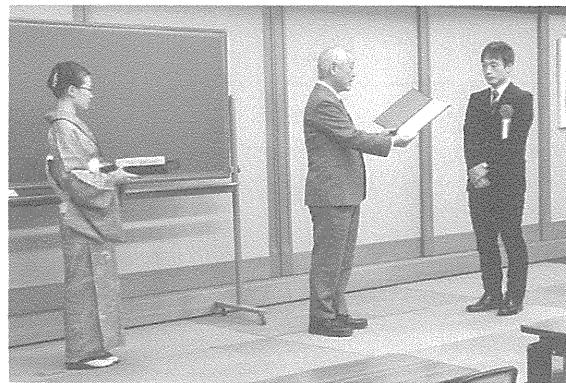
1981年福島県生、仙台市在住

仙台市教育委員会生涯学習部文化財課主事（受賞時）

〔受賞理由〕

受賞者は、東北の古代城柵官衙遺跡の文書行政における律令制の浸透を考えるうえでは、より広い視野で時間軸をもった議論の必要性を指摘し、東北の太平洋側：古代陸奥国の範囲において、定形硯のなかで円面硯の形態と脚部文様による分類を行い、窯跡出土資料による地域編年を列島の広域編年に位置づけ、城柵官衙遺跡及びそれに関わる遺跡の陶硯を対象にして総合的に検討した。その結果、この地域では、陶硯は7世紀後半に出現し、8世紀前半には広域に認められ、形態・文様に地域性が現れ、9世紀に出土数が増加し、陸奥国北端まで分布すること、そして、その受容と展開は城柵の設置に特徴づけられる朝廷の支配領域の拡大過程を示すことを明快に論証しており、今回の受賞の大きな理由となつた。

また、留意したいのは、関根氏が、陸奥国の範囲を、南から北へ、陸奥国南側、陸奥国府域、陸奥国北側、陸奥国北端の4地域に分けていることである。このうち、陸奥国南側



佐々木理事長補佐から賞状を受け取る関根章義氏

は、阿武隈川河口以南の宮城県域と福島県域に相当し、国造の支配があった地域である。陸奥国府域（郡山遺跡と多賀城跡周辺）、陸奥国北側（北上川下流域）、陸奥国北端（北上川上中流域）は、阿武隈川河口以北の宮城県域と岩手県域南半に相当し、蝦夷の支配があった地域で、陶硯の分布や城柵の設置される時期はそれぞれ異なっている。この論文は、陶硯を通して地域を見据え、陸奥国を考える視点も提示しているのである。

その関根氏は、「陸奥国南側」出身の若手研究者で、現在「陸奥国府域」にある仙台市文化財課に勤務しているが、過去には「陸奥国以南」の東海で埋蔵文化財の仕事に就いていた。こうした経歴から生まれた発想が論文執筆の契機となったのだろう。これからの文書行政に関する研究については、地域社会の動きにも目を向けて、「陸奥国以北」、そして「陸奥国北端」、「陸奥国北側」から発想を得ることに期待しておきたい。

主な著作

- ・「陸奥南部における古代ロクロ土師器の系譜」（『中央史学』第28号、2005年3月）
- ・「古代越後国における大戸窯産須恵器の分布」（『白門考古論叢Ⅱ』、2008年11月）
- ・「西遠江における陶硯の様相と地方官衙」（『宮竹野際遺跡6次』、2012年3月）

◆第1回受賞者

- ・東村純子氏（日本学術振興会特別研究員（国立民族学博物館））
「輪状式原始機の研究」（第60巻第1号、2008年6月）
- ・土口史記氏（日本学術振興会特別研究員（京都大学人文科学研究所））
「先秦期における「郡」の形成とその契機」（第61巻第4号、2010年3月）

◆第2回受賞者

- 樋口健太郎氏（大手前大学非常勤講師）
「藤氏長者宣下の再検討」（第63巻第3号、2011年12月）

◆第3回受賞者

- 中村耕作氏（國學院大學文学部助手）
「土器カテゴリー認識の形成・定義—縄文時代前期後半における浅鉢の展開と儀礼行為—」（第64巻第2号、2012年9月）

◆第4回受賞者

- 久米舞子氏（国際日本文化研究センター プロジェクト研究員）
「平安京『西京』の形成」（第64巻第3号、2012年12月）

（所属は受賞時）

（2）奨励研究員の公募

創立者である角田文衛博士が「歴史学・考古学を駆使した古代史の研究と人材の育成」を目的とされていたことを継承し、また、外部研究員との連携により古代学研究推進のために、若手古代史研究者への支援の意味を込めて平成24年度より公募を開始した。

平成27年度の公募は行わなかった。

4. 研究事業

【個人・共同研究】

(1) [研究題目] 被熱石器からみた岩宿時代集落一家は何軒あったのか—

(平成27年度～：所内研究費)

〔研究代表〕 鈴木忠司

①課題の目的及び意義

平成24～26年度にわたって実施した科研費による「礫群からみた岩宿時代集落の研究」では、分析対象とした1) 静岡県高見丘遺跡、2) 東京都法政大学多摩校地遺跡A-0地点、3) 千葉県東林跡遺跡、4) 同西御門明神台遺跡、5) 茨城県赤岩遺跡のうち、1) 3) 5) について、礫群の分析結果を公表した。これらについては現在石器側からの評価を、2) 4) については礫群・石器群の双方からの分析を鋭意継続実施中である。

最終目標である“火の使用（礫群・被熱石器・炉）からみた岩宿時代集落の研究”は、上記のような研究の進捗状況から、本年度の研究は次のステップとして取り組むべき課題である。この段階を経て、礫群・被熱石器・木炭分布・炉を含めた火の使用全般を評価した複合的視野から、終結点として、岩宿時代集落で繰り広げられた日常生活の諸活動、集落構造の実像を明らかにし、岩宿時代集落のモデルを提示することができる。

②平成27年度の研究概要

平成27年度は、資料調査3回（高見丘遺跡2回、新宿若松町遺跡）、石器石材加熱実験（+石蒸し調理）実験を実施した。石器石材加熱実験では、珪質頁岩・メノーなどが短時間の加熱で明瞭な被熱現象を発現し、黒曜岩・安山岩（サヌカイト）・凝灰岩・チャート・シルト岩・無斑晶流紋岩などは、長時間の加熱にも明瞭な被熱現象を発現せず、耐熱性の弱い石材、耐熱性の強い石材の区別が明瞭になった。なお、この実験の結果は、「石蒸し調理実験報告2015 一小規模礫群および石器石材加熱実験3をめぐって」として本誌に収録した。

③次年度の目標、課題

一部石蒸し調理実験も含みつつ、耐熱性の強い石材については加熱を継続し、何時間の加熱で被熱現象が発現するのかを明らかにすべく、石器石材の加熱実験を継続していく。石材ごとに被熱現象発現までの加熱累積時間が明らかになれば、そこで火の使用、あるいは炉の使用時間の長短を知ることができる。また、礫群を伴い、被熱石器が出土し、炉の検出されている遺跡の出土資料について、観察調査を実施する。

④平成27年度の研究成果

・発表論文等

鈴木忠司・坂下貴則・礫群調理実験グループ「石蒸し調理実験記録2014 一小規模礫群および石器石材加熱実験2)」をめぐって—（古代学協会年報『初音』5、2015年8月）、35～55頁。査読無し。

鈴木忠司「磐田市高見丘遺跡における岩宿時代礫群 R56・R57・R58・R60・R61・R106分布図・礫一覧表」「石蒸し調理実験記録2014 一小規模礫群および石器石材加熱実験2)」をめぐってー(古代学協会年報『初音』5、2015年8月)、57~72頁。査読無し。

鈴木忠司「岩宿時代集落と発掘調査報告書のあり方」(『古代文化』第67巻第2号、2015年9月)、98~105頁。査読有り。

鈴木忠司・渡邊武文「礫群使用回数推定法試論—岩宿時代集落研究に寄せてー」(『古代文化』第67巻第4号、2016年3月)、19~41頁。査読有り。

鈴木忠司「東林跡遺跡上層ムラの遺物分布」(『鎌ヶ谷市史研究』第29号、2016年3月)、1~26頁。査読無し。

鈴木忠司「礫群解析法の一つの試み—赤岩遺跡の事例からー」(『旧石器研究』第12号、2016年5月)、165~184頁。査読有り。

(2) [研究題目] 近畿地方における初期農耕集落形成をめぐる考古学的研究

(平成24年度: 所内研究費、平成25~28年度科学研究費 基盤研究(B)
課題番号25284159)

[研究代表] 森岡秀人(古代学協会客員研究員)

[共同研究者] 桑原久男(天理大学教授)、寺前直人(駒澤大学准教授)、伊藤淳史(京都大学文化財総合研究センター)、若林邦彦(同志社大学准教授)、國下多美樹(龍谷大学教授)、上峯篤史(京都大学特別研究員)、山本亮(京都大学大学院文学研究科)、岩崎誠(長岡京市教育委員会)、村上由美子(京都大学総合博物館)、櫻井拓馬(三重県埋蔵文化財センター)、川部浩司(三重県教育委員会)、オブザーバー参加 桐山秀穂(野村美術館)

①課題の目的及び意義

日本列島における農耕社会の成立は、歴史的な社会進化過程の大きな画期である。中でも列島中央部に位置している近畿地方は、その伝播プロセスと東方波及を考察する上に要の地域であり、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての集落遺跡の動態をはじめ、遺構・遺物の精緻な分析と研究は不可欠であり、本研究は住まいの痕跡を濃密にとどめる居住域や集団の墓地構造が窺われる墓域、稻作が行われた水田やアワ・キビなどの農耕が行われた畠地を中心とする生産域などの基礎構造について、主要遺跡を通して改めて分析するとともに、居住地周辺の環濠や水路築造など大規模土木工事のありようや水利などにより組織化された集団の発展や衰退の状況を把握しつつ、初期農耕集落の形成を植生・生業・景観を含めた多角的な視野から総合的に深化させることをねらいとする。

②平成27年度の研究概要

日本列島中央部に位置する近畿地方は、弥生時代前半期を要とする初期農耕社会の形成過程を分析していく上に欠くことのできない地域である。その基盤ともいべき農耕

集落の実態を正確な時間軸に則り、諸分野から多角的観察を深め、定着の様相や伝播ルートなどを総合的に研究する姿勢で今年度も取り組んだ。集落跡・弥生土器・磨製石器・打製石器・木製品・金属器などの要所と観察個数を伸ばしながら、連携研究を行った。平成27年度は、タイミング良く、淡路島で松帆銅鐸群が突然発見されたので、初期青銅器の花形、銅鐸に関しても大量埋納の組み合わせや時期、地域性などの研究を急遽組み入れ、近畿の玄関口とも言える三原平野の持つ重要性を再認識した。関連分野の研究成果吸収では、動物考古学からみた農耕化現象、西部ヨーロッパにおける農耕化と武装化の比較考古学を柱に、研究現状を部内で披瀝する研究会を2回開催し、討議を行って、疑問点解消に努めた。全体調査は、島根県西川津遺跡で山陰側の様相を調べ、三重県納所・中ノ庄遺跡をはじめ、数地点の土器・石器や木器を実地調査した。近畿からの伝播状況を伊勢湾西岸部においても確かめた。個別調査では、展示資料や現在進行形の発掘現場を実見し、関連部分の新資料の探索や再整理の進んだ出土資料の見直しを始めた。大中の湖遺跡木製品・安満遺跡水田跡・田能遺跡金属器・大阪歴史博物館速報資料・新奴国展・関西縄文研究会・松帆銅鐸展示資料などである。また、学会参加や研究会参加を通じ、弥生時代研究や初期農耕社会研究と関係する研究全般に気配りしつつ、本研究の総合化に向けての礎を形成していった。

資料調査 平成27年9月14日・15日 島根県：西川津遺跡

平成27年12月21日～23日 三重県：納所遺跡・中ノ庄遺跡・八重垣神社遺跡・上箕田遺跡

研究会 平成27年6月14日

・石丸恵利子氏（広島大学総合博物館）

「動物考古学からみた農耕社会化—動物資源利用の変化はあったのか?—」

・川部浩司「弥生時代前期環濠／環壕と墓葬をめぐる課題 伊勢湾西岸域の前期弥生土器～貼付突帯要素と遠賀川系の広域型／在地型～」

「弥生前期環濠／環壕と墓葬をめぐる課題」

平成28年3月20日

・山本 亮「近畿地方を中心とした大型壺展開の地域相」

・朝井琢也「金山産サヌカイトの流通に見る瀬戸内の物流の形成と弥生文化の伝播」

・上田裕人「神戸市域の弥生時代前期竪穴建物とその位置づけ」

・ロラン・ネスブルス（フランス外務省出向研究員パリ第一大学（定住から国家への考古学研究所））

「農耕社会から戦争を意識した社会へ—西ヨーロッパにおける農耕化と武装化—」

・森岡秀人「淡路・松帆銅鐸群と銅鐸埋納の多段階実証に向けて—農耕社会の変質をどう物語るのか—（続報）」

③次年度の目標

最終年度を迎えるにあたり、各地の初期農耕集落遺跡の補足調査を遠隔地・近隣地で並行して進めながら、各分野の研究活動のまとめと総括を行う。弥生土器の変化から時間的差違をどの程度実時間として把握できるのか、細分されてきた編年の併行関係を近畿第Ⅰ・Ⅱ様式段階を要に連絡をとっていく。また、弥生時代前半期の打製石器・磨製石器の製作技術や組成を検討、農耕化画期における木製品利用の変化、初期埋納の状況が窺われる淡路の松帆銅鐸群をはじめ、青銅器生産体制の成立と変遷、比較考古学から視点の得られる集団関係の性格や中心一周辺関係なども全体的考察を深化させる。とくに力点を置いた瀬戸内・九州の石材のサスカイト原産地比較調査の成果や、雲宮遺跡の剥片石器補遺調査の成果なども集約を加え、観察からの新たな論点を提示していく。

研究グループ全体で動く分野を横断した調査活動は、今年度、不可欠と考えられつつ残ってしまった愛媛県、広島・山口両県と福岡県、さらに岡山県を加え、これら諸地域を射程に入れる。さらに、調査不足となっている近隣地の調査活動を個別に進め、互いに検討する。対象遺跡は、大阪府高槻市安満遺跡、東大阪市水走・植附・鬼塚・鬼虎川遺跡、和歌山県太田黒田・堅田遺跡、淡路島三原平野などを候補とする。研究者全体の研究会を前半期1回、後半期1回開き、年内の研究総括シンポジウムの準備も進める。とくに後半期の研究会は12月に予定しているシンポジウムに向けたプレ発表の場とし、議論を深め、相互批判により研究目的とこれまでの成果の確認を行う。市民・研究者に向けた公開シンポジウムでは、討議用の簡易なレジュメを参加メンバーが執筆し、向後の調査研究報告書発刊に向けた礎とする。同時に、関連学会や専門研究会にも積極的に出席し、全国的な研究動向を把握する研究活動を継続する。

④平成27年度の研究成果

主な論文発表

森岡秀人「山陰弥生集落の独自性—近畿・山陽との比較から—」(『古代文化』67巻1号、2015年6月)

森岡秀人「高地性集落会下山遺跡再考の手引き」(『みづほ別冊2 弥生研究の交差点』、2015年5月)

桑原久男「弥生時代の動向」(『日本考古学年報』66、2015年5月)

桑原久男「角のあるシカ—絵画土器と銅鐸絵画にみるシカ図像の頭部表現—」(『みづほ別冊2 弥生研究の交差点』)

田畠直彦「山口県佐波川流域の弥生集落」(『古文化談叢』第75集、2016年1月)

寺前直人「屈折像土偶から長原タイプ土偶へ 西日本における農耕開始期土偶の起源」(『駒澤考古40』、2015年6月)

山本 亮「古きを表す壺」(『古墳出現期土器研究』第3号、2015年9月)

上田裕人「弥生時代のイエとムラ」(『第8回KUワークショップ報告論文集』、2015年)

川部浩司「弥生時代前期集住集落にみる祭儀的・觀念世界—瓢箪杓子形土製品・瓢箪形

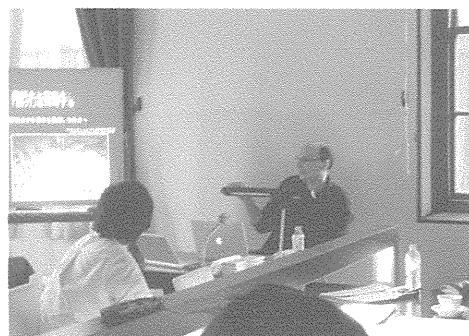
土器共有圏の形成—」(『みづほ別冊2 弥生研究の交差点』)
國下多美樹「京都盆地における古墳出現の前提—地域論ノート—」(『みづほ別冊2 弥生研究の交差点』)

学会発表

森岡秀人「考古学における『畿内』研究の比較—とくに畿内制以前、弥生時代にも力点をおいて—」(古代学研究会11月例会、2015年11月)
森岡秀人「考古学から見た『畿内』社会の研究について」(古代学研究会12月拡大例会シンポジウム、2015年12月)
村上由美子「Management of wetland for initial rice cultivation and use of wood in the final Jomon period」(XIX INQUA、2015年8月)
伊藤淳史「弥生時代水田研究の現状と課題—近畿地方を中心として—」(第195回考古学研究会関西例会、2015年7月)
伊藤淳史「弥生時代水田研究の歩みから—趣旨説明・問題提起に代えて—」(近畿弥生の会第3回テーマ討論会「水田から弥生社会を考える」、2016年3月)
國下多美樹「淀川流域の弥生時代遺跡と青銅器生産」(『枚方の歴史を楽しむ会』、2015年8月)
山本 亮「弥生土器から土師器へ」(近畿弥生の会2015年度弥生時代講座、2015年6月)
上田裕人「弥生時代後期の集落形成」(関西大学 史学・地理学会2015年度大会、2015年9月)



2015年9月 島根県資料調査



2016年3月 研究会

(3) [研究題目] 『宇多天皇御記』・『醍醐天皇御記』逸文の校訂・注釈研究 (平成27年度～：所内研究費)

[研究代表者] 古藤真平 (古代学協会 研究員)

①研究課題の目的及び意義

平安時代前期に摂関政治が成立・展開する中で、宇多天皇・醍醐天皇・村上天皇は親政を行った君主として評価されている。三天皇の日記は自筆本・写本としては遺らないが、江戸時代後期に中津広昵が逸文収集を行い、近代初期の碩学和田英松氏がそれに増

補したものが今日の研究の基盤となっている。本研究では、宇多・醍醐両天皇の日記逸文を対象とし、校訂本文と略注の作成を行うことを目的とする。

②平成27年度の研究概要

国書逸文研究会京都例会の場で、所功氏が和田氏の業績を継承して編集した『三代御記逸文集成』(国書刊行会、1982年)をテキストとする三代御記逸文の講読が輪読形式で行われており、古藤はそこに参加している。本年度においては、同例会で古藤が過去に講読発表を行った宇多・醍醐両天皇御記逸文について、校訂本文と略注の作成を行った。その過程で模索して獲得した形式を村上天皇御記逸文にも応用することを念頭に置いて、同例会が現在講読を進めている村上天皇御記逸文の講読発表を下記の通り行った。

平成27年6月19日：天暦9年（955）正月25日条；天徳2年（958）5月22日条；同3年（959）10月19日、12月某日条／平成27年7月17日：天徳3年8月条、応和元年（961）閏3月27日条（補充的考察）／平成28年1月15日：天徳4年（960）5月10日条／平成28年3月18日：天徳4年5月12～15・20日条。

③次年度計画

校訂本文と略注の作成の範囲を、国書逸文研究会京都例会で講読中の『村上天皇御記』まで広げ、自ら発表を行った箇所を中心に校訂本文と略注の作成を行うこと、以外の箇所についても校訂と略注の付与を試みたい。

④平成27年度の研究成果

古藤真平「嵯峨朝時代の文章生出身官人」(北山円正ほか編『日本古代の「漢」と「和」嵯峨朝の文学から考える』、東京、勉誠出版〔アジア遊学188〕、2015年9月)。

古藤真平「宇多天皇とその同母兄弟姉妹」(『文化学年報』第65輯、京都、同志社大学文化学会、2016年3月)。

(4) [研究題目] 石作・小塩山窯の研究 (平成27年度～：所内研究費)

〔研究代表者〕 石井清司 (古代学協会 客員研究員)

〔共同研究者〕 市川 創 (古代学協会 客員研究員)・高橋照彦 (大阪大学教授)・吉川真司 (京都大学大学院教授)・白石 純 (岡山理科大学自然科学研究所)・山田邦和 (同志社女子大学教授)・網 伸也 (近畿大学教授)・植山 茂 (古代学協会客員研究員)

①研究課題の目的及び意義

石作窯、小塩窯は、平安期を特徴づける焼き物である緑釉陶器の生産実態を解明することを目指し、1979年度に当協会が発掘調査を実施した遺跡である。このうちとくに石作窯では目覚ましい成果があり、窯体を2基検出するとともに、完形に近い緑釉陶器の優品のほか生産に関わる三叉トチンなどの遺物も多く出土した。生産技術(窯および窯道具)と製品を総体的に把握することのできる当調査の学術的意義は高く、その後、平安京の土器編年においてⅡ古(840～870年頃)に属する緑釉陶器の基準資料として位置

づけられている。

こうしたことから、早期の報告書刊行が望まれてきたが、諸事情あり現在まで刊行を行うことができていない。そこで、広く一般に当遺跡を周知すべく報告書を刊行し、併せて今日的な研究状況を踏まえ調査成果と遺跡の意義を再評価・深化することを本研究の目的とする。

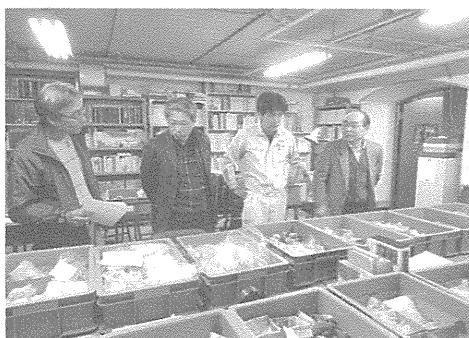
②平成27年度の研究概要

本年度は基本的な整理作業および遺構・遺物に関する検討会を実施した。各日の作業内容は以下のとおりである。

5月8日、遺構原図の整理状況を確認するとともに、必要部分について複写を行った。また、今年度の作業方針等について打合せを行った。6月16日、写真類の保存状態の確認を行うとともに、報告書に図版として掲載する可能性があるものについてフィルムスキャン作業を行った。7月3日、遺物台帳の整理状況を確認するとともに、必要な遺物実測図についてコピーを行った。また、未観察の遺物コンテナのうち2箱分について、観察と属性のカウント、実測作業を行った。7月14日、未観察の遺物コンテナのうち2箱分について、観察と属性のカウント、実測作業を行った。また、小塙窯跡から出土している銭貨について、採拓作業を行った。7月24日、未観察の遺物コンテナのうち2箱分について、観察と属性のカウント、実測作業を行った。また、来年度の整理・研究計画について打ち合わせを行った。12月24日、未観察の遺物コンテナのうち1箱分について、観察と属性のカウント、実測作業を行った。3月3日、石作窯・小塙窯から出土した遺物について検討会を実施し、研究メンバー間で基礎的な理解の共有を行った。また、未観察の遺物コンテナのうち1箱分について、観察と属性のカウント、実測作業を行った。

③次年度計画と目標、課題

上記の作業を経て、本年度で報告書作成のための基礎的な整理を終えることができた。次年度は遺構・遺物・写真図版の作成のほか、トレース作業、本文執筆作業などを進める予定である。また、両窯跡の現況を確認するための現地踏査なども予定している。そのほか、当遺跡に関する学術的知見を深め、より広い視点から日本史上に調査成果を位



2015年3月 遺物検討会の様子

置づけることを目指す。

【研究事業による出版】

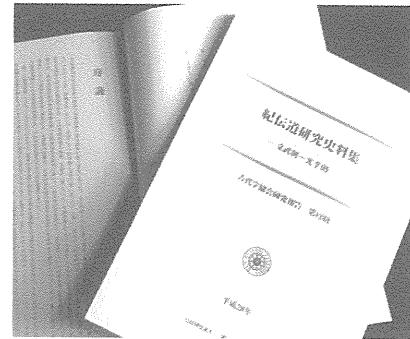
(1) (公財) 古代学協会研究報告第12輯『紀伝道研究史料集一文武朝～光孝朝一』

(B5判、96頁、平成28年3月刊)

編集：古藤真平

目次

- I 秀才・進士両課試制度の沿革、文章科・紀伝道の学科制度・教科内容の沿革
- II 秀才・進士の課試の実施に関する記事の集成
- III 文章生に関する記事の集成



5. 『古代文化』刊行事業

(1) 編集委員会(平成27年度)

編集委員12名、編集参与14名による編集委員会を月1回開催。編集協力委員39名の協力を得ながら、編集方針の決定、特輯の企画、投稿原稿の査読講評、掲載論文の決定等を行う。

◇編集委員 委員長 佐々木達夫 ((公財) 古代学協会)

主任 鈴木 忠司 ((公財) 古代学協会: 日本考古学)

米田 雄介 ((公財) 古代学協会: 日本古代史)

古藤 真平 ((公財) 古代学協会: 日本考古学)

角谷 常子 (奈良大学教授: 中国古代史)

高橋 克壽 (花園大学准教授: 日本考古学)

西野悠紀子 (女性史総合研究会代表: 日本古代史)

野口 実 (京都女子大学教授: 日本古代・中世史)

毛利 憲一 (平安女学院大学准教授: 日本古代史)

森岡 秀人 (芦屋市教育委員会: 日本考古学)

門田 誠一 (佛教大学教授: 東アジア考古学)

山田 邦和 (同志社女子大学教授: 日本考古学)

吉野 秋二 (京都産業大学教授: 日本古代史)

◇編集参与 市 大樹 (大阪大学准教授: 日本古代史)

鈴木 裕明 (樞原考古学研究所: 日本考古学)

栗原 麻子 (大阪大学准教授: 古代ギリシア史)

桑山 由文 (京都女子大学准教授: ローマ史)

桑原 久男 (天理大学教授: 日本考古学)

今 正秀 (奈良教育大学教授: 日本古代・中世史)

田中 俊明（滋賀県立大学教授：朝鮮古代史）
中村 健二（（公財）滋賀県文化財保護協会：日本考古学）
中村 大（立命館グローバル・イノベーション研究機構：日本考古学）
古市 晃（神戸大学大学院准教授：飛鳥・日本古代史）
中砂 明徳（京都大学准教授：中国古代史）
宮本 純二（京都橘大学講師：エジプト学）
吉川 真司（京都大学教授：日本古代史）
村野 正景（京都文化博物館：メソアメリカ考古学）
書記 横大路綾子（（公財）古代学協会）
事務 麻森 敦子（（公財）古代学協会）

◇編集協力委員

北海道・東北：小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）、斎野裕彦（仙台市教育委員会）、辻 秀人（東北学院大学）
関 東：金子直行（（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、川尻秋生（早稲田大学）、車崎正彦（早稲田大学）、佐々木恵介（聖心女子大学）、寺前直人（駒澤大学）、比田井克仁（中野区教育委員会）、松木武彦（国立歴史民俗博物館）、三上喜孝（国立歴史民俗博物館）
中 部：伊藤雅文（（公財）石川県埋蔵文化財センター）、川添和暁（（公財）愛知県埋蔵文化財センター）、久田正弘（石川県教育委員会）、鈴木一有（浜松市教育委員会）、鈴木景二（富山大学）、中沢道彦（長野県）
近 蔵：関川尚功（奈良県立橿原考古学研究所）、山中 章（三重大学名誉教授）
中 国：今津勝紀（岡山大学）、大日方克己（島根大学）、野島 永（広島大学）、濱田竜彦（鳥取県教育委員会）、松本岩雄（島根県立八雲立つ風土記の丘）
四 国：寺内 浩（愛媛大学）、中村 豊（徳島大学）、村上恭通（愛媛大学）、
九 州：木下尚子（熊本大学）、坂上康俊（九州大学）、永山修一（ラ・サール学園）、
松井和幸（北九州市立自然史・歴史博物館）、宮地聰一郎（福岡県教育委員会）、柳澤一男（宮崎大学）
海外領域：青山和夫（茨城大学）、川本芳昭（九州大学）、工藤元男（早稲田大学）、妹尾達夫（中央大学）、南雲泰輔（山口大学）、長谷川修一（立教大学）

（2）『古代文化』の刊行

第67巻第1号 古谷紋子：車礼からみた殿下乗合事件

（平成27年6月）清水康二：初期三角縁神獣鏡成立過程における鏡範再利用

特輯 山陰弥生集落研究の論点—地域性、独自性、交易と手工業—
濱田竜彦：特輯『山陰弥生集落研究の論点—地域性、独自性、交易と手

工業一』に寄せて

- 高田健一：鳥取平野における土地環境の変化と弥生集落の形成活動
中原 計：弥生時代における山陰地方の森林植生と木材利用
中川 寧：山陰の集落と墳墓の関係—島根県東部の検討を通して—
松井 潔：大型器台の組列とその機能—「西伯耆型」大型器台と「東伯耆型」大型器台—
米田克彦：玉生産からみた山陰弥生社会
高尾浩司：鉄器の流通・保有状況からみた山陰弥生集落
森岡秀人：山陰弥生集落の独自性—近畿・山陽との比較から—
＊＊＊＊＊
市村慎太郎：布留式の様式からみた須恵器出現期遡上の可能性
渋谷綾子：日本考古学における残存デンブン粒分析の現状と課題
保坂康夫：〈考古学人国記〉—評伝 戦後日本の考古学を支えた地域研究者（5）—上野晴朗と『甲州風土記』の考古学
石井清司：〈私の古代学〉（1）篠窯を掘る
山本忠尚：正倉院宝物を十倍楽しむ（7）
野口孝子・栗田はつき：『小右記』註釈（1）長和4年4月1日～4日条
中野和浩：宮崎県えびの市 島内139号地下式横穴墓
西川寿勝：水野正好先生を偲んで
石田真衣：波部雄一郎著『トレマイオス王国と東地中海世界—ヘレニズム王権とディオニュシズム』
西川寿勝：日本書紀研究会編『日本書紀研究』第三十冊記念号
竹内 亮：西本昌弘著『飛鳥・藤原と古代王権』
第67巻第2号 藤原 哲：古墳時代における軍事組織像の検討
(平成27年9月) 池谷信之：須恵器／灰釉陶器移行期における粘土の選択性について—黒 笠40・89号窯跡の胎土分析にもとづいて—
上村正裕：大伴古麻呂と奈良時代政治史の展開
青山和夫：マヤ文明の起源と公共祭祀—グアテマラ・セイバル遺跡の公共祭祀建築と緑色石製磨製石斧の供物を中心に—
土井和幸：百舌鳥古墳群の立地に対する新視点
田中祐樹：造付立間環状鏡板付轡に関する新視点—面繫への接続方法による分類試案—
木下尚子：奄美・沖縄諸島は奇跡の島々であったのか—『環太平洋の環境文明史』琉球環境文明史班の研究成果によせて—
鈴木忠司：岩宿時代集落研究と発掘調査報告書のあり方
山本みなみ・田口愛実：『小右記』註釈（2）—長和4年4月5日～6

日条一

- 角田文衛：西洋古代史（1934年）（6）最終回
 井上 弘：〈考古学入国記〉（6）豊 元國と府中高校地歴部
 石井清司：〈私の古代学〉（2）瓦窯を掘る
 山本忠尚：正倉院宝物を十倍楽しむ（8）
 吉野秋二：平安京跡左京九条三坊十町（施薬院御倉跡）出土の木簡
 渡辺 誠：江坂輝弥先生の学問と業績
 國下多美樹：積山 洋著『古代の都城と東アジア 大極殿と難波京』
 積山 洋：國下多美樹著『長岡京の歴史考古学研究』
 奥山広規：ブライアン・ウォード＝パーキンズ著、南雲泰輔訳『ローマ帝国の崩壊：文明が終わるということ』
 公益財団法人古代学協会 第5回「角田文衛古代学奨励賞」受賞者発表
 瀬口眞司：初期土偶の根本的性質と展開過程
 山田彩起子：平安時代中期における后の女房の存在形態について—職掌・序列などを中心に—

 特輯「北アメリカ考古学の現状」
 佐々木憲一：特輯「北アメリカ考古学の現状」に寄せて
 C. グリヤー：北西海岸
 G. M. スミス・C. モーガン：高原および大盆地
 K. L. フル：カリフォルニア地域—広大な地域の巨視的・微視的視点から—
 W. R. ウッド：ロッキー山脈東麓
 F. J. ロビンソン：北東部ウッドランド
 P. J. カー・S. E. プライス：合衆国南東部

 嘉幡 茂・村上達也：古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史
 復元—「トラランカレカ考古学プロジェクト」の目的と調査動向—
 平澤 悠：内陸アラスカにおける細石刃石器群研究の現状と課題
 松尾登史子：考古学からみた「ミロのヴィーナス」—R. コウサーの近著論文から—
 大谷久美子：『小右記』註釈（3）—長和4年4月7日条—
 七原恵史・清水正明：〈考古学入国記〉（7）久永春男の編年研究 一尾張・三河・遠江—
 金関 恕：樋口隆康さんのご逝去を悼む
 閩谷 寿：黒板伸夫先生の想い出

近藤 広：平安時代の特異な埋納遺構の発見—滋賀県栗東市手原遺跡—
小田和利：特別史跡水城跡整備・活用に向けての調査

繁田信一：山下克明著『平安時代陰陽道史研究』

川尻秋生：上原真人著『古代寺院の資産と經營—寺院資財帳の考古学—』

吉野秋二：川北靖之著『日唐律令法の基礎的研究』

森岡秀人：中村順昭著『地方官人たちの古代史 律令国家を支えた人びと』

第67巻第4号 中林隆之：平安前・中期の華厳宗と古代王権

(平成28年3月) 鈴木忠司・渡邊武文：礫群使用回数推定法試論—岩宿時代集落研究によ
せて

小河 浩：前360年代のトラキアにおけるコテュスとアテナイの確執

・・・・・ 特別企画「山中一郎とフランス旧石器考古学」

会田容弘：特別企画「山中一郎とフランス旧石器考古学」に寄せて

J. ペルグラン・山中一郎：フランス式の石器技術学から見た後期旧石
器時代の横道遺跡出土資料の研究

M. ジュリアン・C. カルラン、富井 真訳：『パンスヴァンのある秋
—IV20面におけるマドレーヌ人のキャンプ— (要旨)』

・・・・・ 間谷 寿：12世紀後半の婚儀の様相

成田千津 若菜益治 近藤公子：『小右記』註釈（4）—長和4年4月8
日～11日条—

佐藤禎宏：〈考古学人国記〉（8）柏倉亮吉と北辺の古墳

鈴木久男：〈私の古代学〉（3）鳥羽離宮跡の調査

山本忠尚：正倉院宝物を十倍楽しむ（9）

的崎 薫：兵庫県南あわじ市出土の松帆銅鐸

齊賀万智：美川圭著『後白河天皇 日本第一の大天狗』

下石敬太郎：生駒孝臣著『中世の畿内武士団と公武政権』

山本みなみ：高橋昌明著『京都<千年の都>の歴史』

6. 普及事業

(1) 公開講演会

「第5回角田文衛古代学奨励賞受賞記念講演」

- ・関根章義（仙台市教育委員会）「古代陸奥国の陶硯と律令国家」
- ・米田雄介（元正倉院事務所長・古代学協会理事 研究部長）「正倉院宝物と文房四宝」

日時：平成27年10月3日（土）

場所：佛教大学四条センター

参加人数：約50名

公益財団法人 古代学協会公開講演会
第5回角田文衛古代学奨励賞 受賞記念講演

日 時：10月3日（土）午後1時半～3時（2時間）
会 場：佛教大学四条センター（東京都文京区湯島2丁目6番地、TEL 03-5804-1400）
会 員：会員、准会員、一般の方々など
料 金：1,000円（税込）。会員価格割引あり。会員料金は800円。

古代学協会の陶硯と律令国家
関根 章義 (仙台市教育委員会)

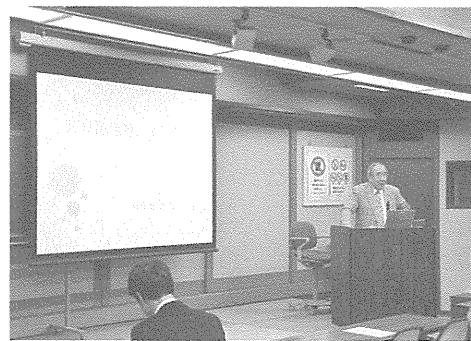
お問い合わせ：株式会社アーバンプロモーション
会員登録・会員登録料金・会員登録料金
お問い合わせ：株式会社アーバンプロモーション
会員登録・会員登録料金・会員登録料金

正倉院宝物と文房四宝
米田 雄介 (元正倉院事務所長)

お問い合わせ：株式会社アーバンプロモーション
会員登録・会員登録料金・会員登録料金
お問い合わせ：株式会社アーバンプロモーション
会員登録・会員登録料金・会員登録料金



角田文衛古代学奨励賞受賞記念講演(関根章義氏)



公開講演会（古代学協会理事 米田雄介）

(2) 公開講座

1) 古代学講座

平成23年度よりスタートした。少人数で楽しく受講できる内容であるとともに、継続講座をいくつか設け、単に先生の話を聞くだけでなく、積極的な学びの場を提供している。

◆平成27年度前期講座（平成27年4月～7月、9月）

講座名	講 師	開催日
『小右記』講読 —平安貴族の日常に触れてみよう—	野口孝子（同志社女子大学講師）	第2土曜日
『吾妻鏡』に見る鎌倉幕府と京都 —建久六年記を読む—	岩田慎平（立命館大学非常勤講師）	第2土曜日
「京都学講座」平安京研究の方法3	山田邦和（同志社女子大学教授）	第3金曜日
邪馬台国畿内説への接近 —集落研究の方向性からの読み解き—	森岡秀人（古代学協会客員研究員）	第4水曜日
『紫式部集』を読む	中 周子（大阪樟蔭女子大学教授）	5/23、6/27、7/25
ヒエログリフ文法講座	深川慎吾（古代学協会客員研究員）	第4土曜日

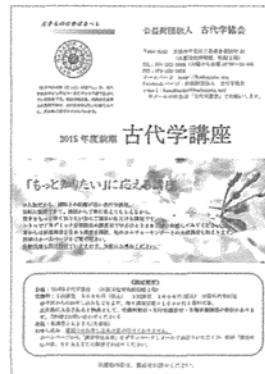
※日付のないものは5回

◆平成27年度後期講座（平成27年10月・11月～平成28年1月～3月）

講座名	講 師	開催日
『小右記』講読 —平安貴族の日常に触れてみよう—	野口孝子（同志社女子大学講師）	第2土曜日
『吾妻鏡』に見る鎌倉幕府と京都 —建久六年記を読む—	岩田慎平（立命館大学非常勤講師）	第2土曜日
「京都学講座」平安京研究の方法4	山田邦和（同志社女子大学教授）	第3金曜日
考古学から見た京都の歴史の実態 —発掘成果から歴史の史実を読み解く—	梶川敏夫（京都女子大学非常勤講師）	第2水曜日
銅鐸の多数埋納の謎を解き明かす —淡路島松帆銅鐸群の出現を受けて—	森岡秀人（古代学協会客員研究員）	第4水曜日
紫式部の娘の集『藤三位集』を読む	中 周子（大阪樟蔭女子大学教授）	第4土曜日
ヒエログリフ文法講座	深川慎吾（古代学協会客員研究員）	第4土曜日



梶川敏夫先生「考古学から見た京都の歴史の実態」



2) 連携講座

古代学講座は受講可能者数が少人数なので、古代学講座、古代学協会の裾野をより広げるため、他機関と連携した講座を開設した。特に佛教大学四条センターの講座は毎回100名以上の受講者となった。

【佛教大学四条センター提携講座】

場 所：佛教大学四条センター（京都市下京区四条烏

丸北東角 京都三井ビルディング4階）

日 時：平成27年5/16、6/20、7/18、9/19、10/17、

11/21、12/19、平成28年2/6、2/20、3/19

いずれも土曜日 15：30～17：00

講 師：西川寿勝（大阪府教育委員会文化財保護課副主査）

テマ：考古学からみた古代豪族



【朝日カルチャーセンター京都・古代学協会共催講座】

会場：朝日カルチャーセンター（京都市中京区河原町三条上ル 京都朝日会館8階）

日時	講 師	テマ
4/7	鳥居本幸代 (京都ノートルダム女子大学教授)	平安貴族のくらし—住まいとファッション—
7/10	河内将芳 (奈良大学教授)	戦国時代京都の祇園祭
8/1	中村 大 (立命館グローバル・イノベーション研究機構専門研究員)	解明進む地域色豊かな縄文時代 —最新の調査・研究成果をもとに—

(3) 広報物の出版

1) 『初音』 5 (平成27年8月30日発行、B5判、97頁)

- ・平成26年度事業報告
- ・研究報告

鈴木忠司・坂下貴則・礫群調理実験グループ：「石蒸し調理実験記録2014—小規模礫群調理および石器石材加熱実験2—をめぐって」

鈴木忠司：「磐田市高見丘遺跡郡における岩宿時代礫群 R56・R57・R58・R60・R61・R106分布図・礫一覧表

関広尚世：「世界遺産のはじまりと日本人研究者 —「古都京都の文化財」登録20周年を迎えて—

2) 古代学協会だより『土車』第128号 (平成27年11月30日発行、B5判、8頁)

(4) 資料の活用・管理・整理

1) 所蔵資料の活用

当協会では、創立以来、研究活動の為、文献資料・考古資料を収集してきた。資料は一部を京都文化博物館に寄託し、一般や公共機関、研究機関、研究者の利用希望に応じて、可能な限り資料を提供している。資料提供には資料調査等に係る閲覧や貸出及び掲載許可申請がある。(一部有料)

平成27年度資料貸出等

利用形態	史料名	数	申請者	使用目的等
撮影	『大島本 源氏物語』	53	(株) TBS ビジョン	「高島礼子 日本の古都～その絶景に歴史あり～」2015年7月8日 21時 BS-TBS 放映 写真1
写真掲載	『大島本 源氏物語』 帯木冒頭	1	(株) 河出書房新社	今野真二著『図説日本語の歴史』
複写	『清辨眼抄』	1	中町美香子	研究
熟覧	『兵範記』切、魚魯愚鈔、 本朝皇胤招運録	1	宮内庁書陵部	皇室制度関係史料の調査

利用形態	史料名	数	申請者	使用目的等
熟覧 実測	ソーアン遺跡(パキスタン) 出土石器	1	野口 淳(明治大学)	研究 写真2
展示	『大島本 源氏物語』 乙女	1	京都文化博物館	(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター設立35周年記念『和魂漢才』展 写真3
写真領布	勅旨所牒、『明月記』断簡、 『兵範記』切、魚魯愚鈔、 紫式部日記断簡、伝寢蓮筆 『水鏡』	6	宮内庁書陵部	皇室制度関係史料の編修
調査	アコリス遺跡発掘調査資料		川西宏幸	資料のデジタル化保存検討
熟覧 写真撮影	アコリス遺跡出土資料 コプト織		尾形充彦、龍野征代	研究
熟覧 写真撮影	アコリス遺跡出土資料 コプト織	30	村上由美子(京都大学総合博物館)、東村純子(福井大学)ほか	研究及び京都大学総合博物館資料との比較 写真4
写真領布	清涼殿復元模型 (平安博物館展示)	1	株式会社ジェイアール 東海エージェンシー	「講座歴史の歩き方」第75回小冊子



写真1：『大島本 源氏物語』撮影風景



写真2：ソーアン遺跡出土石器の実測

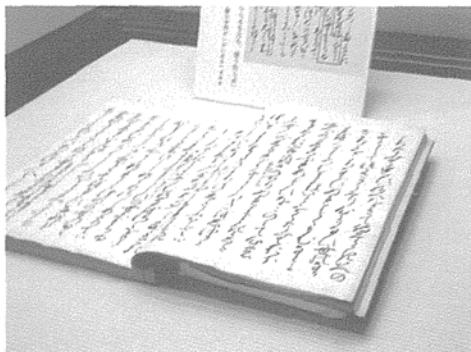


写真3：『大島本 源氏物語』乙女

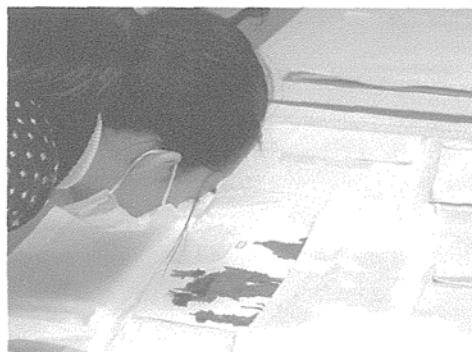


写真4：アコリス遺跡出土 コプト織

2) 図書資料の収集・活用

古代学協会がこれまで刊行してきた刊行物、角田文衛博士から寄贈された、国内外の貴重な図書、研究活動に必要な基礎図書及び、国内外から交換及び寄贈された最新の定期刊行物を一部公開している。

角田文衛博士から協会に寄贈された図書については、整理され次第順次協会ホームページに一覧表を掲載する予定である。

平成27年度 交換・受贈逐次刊行物一覧

〈国内〉

- 青山学院大学文学部史学科研究室『青山史学』
青山学院大学史学会『史友』
青山学院大学日文院生の会『緑闇詞林』
青山学院大学日本文学会『青山語文』
出光美術館『館報』『研究紀要』
岩手史学会『岩手史学研究』
浦幌町立博物館『紀要』
大阪大谷大学歴史文化学科『歴史文化研究』『志学台
考古一年代・産地・分析等一』
大阪学院大学人文自然学会『人文自然論叢』
大阪教育大学歴史学研究室『歴史研究』
大阪商業大学商業史博物館『紀要』
大阪商業大学比較地域研究所『地域と社会』
大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢』
大阪大学国語国文学会『語文』
大阪府立大学人間社会学部言語文化学科『言語文化学
研究 日本語日本文学編』
大阪府立大学人間社会学部人間科学科・大学院人間社
会学研究科人間科学専攻『人間科学：大阪府立大学
紀要』
大阪府立大学日本言語文化学会『百舌鳥国文』
大妻女子大学『大妻女子大学紀要—文系—』
大妻女子大学国文学会『大妻国文』
岡山市立オリエント美術館『紀要』
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『紀要』
岡山理科大学『自然科学研究所研究報告』
お茶の水女子大学読史会『お茶の水史学』
学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』
神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗 神奈川
大学日本常民文化研究所論集』(発行所：平凡社)
神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センタ
ー『年報 非文字資料研究』
金沢大学人文学類考古学研究室『金沢大学考古学紀
要』
元興寺文化財研究所『研究報告』
関西大学史学・地理学会『史泉』
関西学院大学史学会『関西学院史学』
北九州市立自然史・歴史博物館『研究報告 B類歴史』
京都産業大学日本文化研究所『紀要』『所報 あふひ』
京都女子大学『国文論藻 京都女子大学大学院文学研
究科研究紀要』
京都女子大学国文学会『女子大国文』
京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール『紫苑』
京都市歴史資料館『紀要』
京都大学人文科学研究所『東方學報 京都』
京都大学人文科学研究所附属東アジア情報学研究セン
ター『東洋学文献類目』
京都橘大学大学院『研究論集 文学研究科』
京都橘大学文学部『京都橘大学歴史遺産調査報告』
京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化
財情報』
京都府立総合資料館『資料館紀要』
宮内庁書陵部『書陵部紀要〔陵墓篇〕』
宮内庁正倉院事務所『正倉院紀要』
藝林會『藝林』
皇學館大学研究開発推進センター『紀要』
皇學館大学史学会『皇學館史学』
皇學館大学人文学会『皇學館論叢』
考古学研究会『考古学研究』
神戸学院大学人文学部『紀要』
國學院大学大学院史学専攻大学院会『史学研究集録』
国文学研究資料館『調査研究報告』
国立歴史民俗博物館『研究報告』
古代オリエント博物館『紀要』
古代学研究会『古代学研究』
「古代史の海」の会『古代史の海』
駒澤大学文学部国文学研究室『駒澤国文』
駒澤大学大学院史学会『駒澤大学大学院史学論集』
史学会『史学雑誌』
史学研究会『史林』
滋賀県立大学人間文化学部『人間文化』
信濃史学会『信濃』
下関市立考古博物館『研究紀要』
上智大学史学会『上智史学』
続日本紀研究会『続日本紀研究』
崇城大学芸術学部『研究紀要』
専修大学学会『専修人文論集』
専修大学歴史学会『専修史学』
大東文化大学漢学会『大東文化大学漢学会誌』

- たら研究会『たら研究』
 多摩考古学会『多摩考古』
 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部『紀要』
 地中海学会『地中海学研究』
 地方史研究協議会『地方史研究』
 中信美術奨励基金『美術京都』
 朝鮮学会『朝鮮学報』
 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻
 『文芸言語研究』
 筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻『筑波
 大学先史学・考古学研究』『歴史人類』
 土浦市立博物館『紀要』
 鶴見大学文化財学会『文化財学雑誌』
 帝塚山大学人文学部『紀要』
 天理参考館『館報』
 天理大学『学報 語学・文学・人文・社会・自然編』
 天理大学考古学・民俗学研究室『紀要 古事』
 東海大学大学院日本史学友会『湘南史学』
 東京国立博物館『紀要』『研究誌 MUSEUM』
 東京大学史料編纂所『研究紀要』『所報』
 東京文化財研究所『美術研究』
 同志社大学人文学会『人文学』
 同志社大学文化学会『文化学年報』
 東方学会『東方学会報』
 東北学院大学学術研究会『東北学院大学論集 歴史と
 文化』
 東北学院大学東北文化研究所『紀要』
 東北大大学院文学研究科『東北大学文学研究科研究
 年報』
 東北大大学院文学研究科東北文化研究室『東北文化
 研究室紀要』
 東北大大学院文学研究科日本思想史学研究室『日本
 思想史研究』
 東北大大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』
 東北大大学理蔵文化財調査室『東北大大学理蔵文化財調査
 室年次報告』
 東洋史研究会『東洋史研究』
 東洋大学『東洋大学文学部紀要史学編』
 東洋大学白山史学会『白山史学』
 東洋文庫『東洋学報』
 徳島文理大学比較文化研究所『年報』
 徳島文理大学文学部『徳島文理大学文学論叢』
 長野県考古学会『長野県考古学会誌』
 名古屋市博物館『研究紀要』
 名古屋大学文学部『研究論集』(考古学抜刷)
 『並木の里』の会『並木の里』
- 奈良女子大学史学会『寧楽史苑』
 奈良大学文学部文化財学科『文化財学報』
 奈良文化財研究所『紀要』
 新潟史学会『新潟史学』
 日本印度学仏教学会『印度学佛教学研究』
 日本オリエント学会『オリエント』
 日本海事史学会『海事史研究』
 日本史研究会『日本史研究』
 日本人類学会『ANTHROPOLOGICAL SCIENCE』
 『ANTHROPOLOGICAL SCIENCE (JAPANESE
 SERIES)』
 日本西洋史学会『西洋史学』
 日本歴史学会『日本歴史』
 ノートルダム清心女子大学生活文化研究所『年報』
 花園大学史学会『花園史学』
 東アジアの古代文化を考える会同人誌分科会『古代文
 化を考える』
 平等院『鳳翔学叢』
 広島史学研究会『史学研究』
 広島大学大学院教育学研究科下向井研究室『史人』
 佛教大学教育学部『教育学部論集』
 佛教大学仏教学部『仏教学部論集』
 佛教大学文学部『文学部論集』
 佛教大学歴史学部『歴史学部論集』
 佛教大学総合研究所『所報』
 文化史学会『文化史学』
 法政大学文学部『紀要』
 法政大学史学会『法政史学』
 北海道開拓記念館『紀要』
 三田史学会『史学』
 武藏野大学国文学会『武藏野日本文学』
 武藏野大学日本文学研究所『紀要』
 明治大学文学部考古学研究室『考古学集刊』
 山形大学歴史・地理・人類学研究会『歴史・地理・人
 類学論集』
 山口県立山口博物館『研究報告』
 山口大学埋蔵文化財資料館『年報』
 立正大学史学会『立正史学』
 龍谷大学佛教文化研究所『紀要』
 龍谷大学史学会『龍谷史壇』
 両丹考古学研究会『太邇波考古』
 早稲田大学教育学研究科『紀要』
 早稲田大学會津八一記念博物館『研究紀要』
 早稲田大学国文学会『国文学研究』
 早稲田大学史学会『史觀』
- 〈海外〉
 中国 中国社会科学院考古研究所『考古』『考古学報』。敦煌研究院『敦煌研究』。吉林大学『吉林大学社会科学
 学報』『史学集刊』。
 台湾 国立台湾大学芸術史研究所『美術史研究集刊』。
 韓国 国史編纂委員会『韓國史研究彙報』。忠南大学校百濟研究所『百濟研究』。
 アメリカ The Metropolitan Museum, *The Metropolitan Museum of Art Bulletin.*

スロバキア Archeologický ústav SAV Nitra. *SLOVENSKÁ ARCHEOLOGIA*.

ドイツ Deutschen Archäologischen Instituts, *BERICHT DER RÖMISCHE-GERMANISCHEN KOMMISSION; GERMANIA; MITTEILUNGEN DES DEUTSCHEN ARCHÄOLOGISCHEN INSTITUTS RÖMISCHE ABTEILUNG*.

トルコ Turkish Historical Society, *BELLETEN*.

フランス Académie des Inscriptions & Belles-Lettres, *COMPTES RENDUS DES SÉANCES DE L'ANNÉE*.

ポーランド Scientific Library, *FOLIA QUATERNARIA*.

ロシア Russian Academy of Science Library, *Вестник Древней Истории*.

3) 角田文衛博士遺贈資料の整理

角田文衛博士の御遺族から寄贈された、書簡・写真・研究資料等を公開すべく整理作業を進めている。

7. その他

(1) 他機関との協力事業等

【16学協会陵墓担当運営委員会】

- ・陵墓関連16学協会全体会議・書陵部懇談会（平成27年7月16日）
- ・渋谷向山古墳（景行天皇 山辺道上陵）整備工事予定区域限定公開（平成27年12月4日）
- ・野口王墓古墳（「天武・持統天皇陵」）立会調査の見学（平成28年1月27日）
- ・土師ニサンザイ古墳（「東百舌鳥陵墓参考地」）立会調査の見学（平成28年1月29日）
- ・天理市渋谷向山古墳（現景行天皇陵）立入り観察（平成28年3月26日）

【京都市生涯学習諮詢フォーラムへの加盟】

京都市教育委員会が運営する生涯学習に関する団体のネットワーク組織で、生涯学習情報検索「協まなびネット」での講座・イベント情報の発信

【一般社団法人日本考古学協会大会図書交換会への参加】

平成27年5月24日 於：帝京大学八王子キャンパス

平成27年10月18日 於：奈良大学

【日本史研究会総会図書販売会への参加】

平成27年10月10・11日 於：京都大学

(2) ホームページ (<http://kodaigaku.org>)

協会の基本情報、講座や講演会などの事業の案内。『古代文化』への投稿案内、バックナンバーから最新号までの情報公開を行っている。